



THINK × ACT
KANSAI
UNIVERSITY

CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning

Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

March 2014

vol. 14



三者協働型アクティブラーニング から見たMOOCとの関わり合い

教育推進部 副部長 山本 敏幸

本ニュースレター Vol.8では映写機を発明したエディソンの教育に対する夢について触れたが、その延長として、映像メディアを中心に昨今、高等教育の現場で話題になっているMOOCについて考えてみる。

MOOCとは、Massive Open Online Coursesのことで、MOOCムーブメントのきっかけとなったカーンアカデミー創設者S.カーン氏が体系だった質の高い教育を貧富の差に関わらず、世界中の全ての学習者に無償で提供することを掲げ、自ら実践したことに端を発し、財界の大物達の資金援助支援の下で拡大した、インターネットを活用した新しい教育の形態である。

MOOCの急速な普及の背景には、次のような経済効果があるからである。優秀な学生人材確保に奔走する米国の大手大学がこのMOOCに目をつけ、自分たちが提供する教材コンテンツに世界中からネットでアクセスしてくる学生候補を容易く発掘できる仕組みがここに来上がった。さらに、こういった人材を世界中から発掘し、米国の有名大学に送り込み、卒業時にはこういった人材を必要とする企業に有望な社員として紹介するビジネスモデルが確立している。

MOOC以前の従来型のeラーニングのコンテンツは、世界規模の統一化された文書形式を目的としたテクノロジーであるHTMLの進化と共に普及してきた教育形態である。多少の画像があるものの、文字中心のコンテンツが主流のeBook的な性格が

強く、インターネットで配信できる電子教科書といった位置づけであった。インタラクティブな学び、実際に仲間たちと授業を受けているような臨場感の要素が欠けていた。どちらかといえば、教員目線の教材コンテンツを学習者個人に一方的に提供することが多く、学習者視点の学びの促進、受講生同士の絆や喜びの共有とはほど遠いものであった。

一方、MOOCコンテンツは実際に授業を受けているような臨場感のあるコンテンツを、映像メディアをふんだんに利用し、コースコンテンツとのインタラクティブな内在性の機能や担当教員と共に学ぶ受講生の仲間たちとのソーシャルなコミュニケーションの場を提供することで、同じコンテンツを学ぶ仲間たちが知識や経験を共有し共感することで学びを深めていくことを目指している。これは、本来の学びの姿のように思える。

しかし、日本の大学では大学レベルでこのMOOCの動きを素直に受け入れるにはかなりの無理がある。つまり、MOOCで提供されるコースはそれぞれのコースが独立して存在し、大学独自のミッションを主軸としたカリキュラム全体の構成要素になっていない点である。MOOCで提供されるコースは言うなればデパートのショーウィンドーに並ぶような客寄せ用の目玉商品で、体系だった大学の教育理念は見えてこない。きちんとしたカリキュラムマップなしに受講者が望むコースを準備しても、ただの受講者の知的好奇心を満足させるための個々のコース

でしかない。これらのコースはいくら数が揃ってもカリキュラムにはなり得ないし、大学のミッションやビジョンの反映にはならない。

反面、MOOC以前は紙面に印字された文字でしか知識、経験や知恵を残すことができなかったが、MOOCコンテンツではこれまでの情報表現の集大成である映像、画像、音声、アニメーション、文字などのリッチメディアでの表現が可能となる。つまり、本来の学習コンテンツの利用者と同じ目線の学生たちによる、インタラクティブな教材コンテンツの開発、教育者としての経験、工夫、知恵の可視化が可能となるのである。これは教育者としてのこれまでの教育経験をふりかえりによりメタ認知するというFDにつながることにもなる。強いては、教鞭を取っている大学の誇りある知的財産として継続し、後世に残せる遺産となるのではないだろうか。

今MOOCを活用して本学が取り組むべき一つの教育事業として私が思いつくのは、高等教育機関の使命の一つとして、日本の全般的な教育水準の基礎学力が身につけていない、日本中にいる子供達に社会人になる前にもう一度学び直しのチャンスを与えること、都会に生まれた子供達と同レベルの教育を受ける機会を与えること、また、分数、小数等の基本的な概念すら分からずに大きくなってしまった人たちに手を差し伸べる教育の仕組みが確立できることである。

本学の使命は、考動力ある人材育成で将来の日本において社会貢献できる人材を輩出することにとどまらず、社会貢献の一環として、基礎的な教養を身につける機会を逸してしまっただけの学びなおしの機会を無償で提供することも含まれるように思う。MOOCムーブメントを機に、本学でなければできない三者協働型アクティブラーニングの成果を反映した学びの場を構築できれば素晴らしいことである。

フォーラム・セミナー報告

第10回 FDフォーラムを開催しました

1月25日、全国私立大学FD連携フォーラムとの共催・関西地区FD連絡協議会の協賛の下に第10回関西大学FDフォーラムが開催された。今回のテーマ『アクティブラーニングとはじめ at & from Kansai University』は可能性と課題が明らかになってきたアクティブラーニングについて原点から考え直し、関西大学で展開されている授業実践について報告し、これを機にアクティブラーニングの輪を学内外に広げていくことを「ねらい」と「ねがい」としたものである。当日は、全国の大学等から64名の参加をいただいた。第一部の基調講演、能動的な学生の取り組みを伝える第二部のポスターセッションを経たのち、参加者からの質問や意見、感想などをフィードバックする時間を第三部に持った。

語義にしたがえばアクティブラーニングは



基調講演の様子

行為・動作、あるいは状態・態度を示すものであり、その動作や態度への到達が目標として設定され、その目標を実現するために手法が編まれ、方略が組み込まれるのだが、2012年の中教審答申がこれを手法の総称として定義したため、ノウハウやチップス、マニュアルの作成や入手に汲々とする傾向が生まれている。基調講演で演者はこのことへの警鐘を鳴らし、“teaching (teacher-centered) から learning (student-centered) へ” というパラダイムシフトに与するならばアクティブラーニングを実現するためには先ず学生をどのような学習者に育てたいのかという哲学的思惟が必要であると訴え、特に初年次における「問い」の構造や拡がり・奥行きを学ぶ体験がその後の「学び」をより充実したものにすることがあるとして、「問い」を学生自らが発見・発掘する「学問モデル」が有用であると報告した。

第二部ではこの学問モデルを支援する

日時：1月25日(土) 13:00～17:30
場所：第2学舎2号館 C304/C301教室

LA (Learning Assistant)、コラボレーション・コモンズでラーニングカフェを開催するLA、ライティングラボで学生の支援をするTA、シラバスや担当教員など包括的に科目をデザインして開設を提案する科目提案学生委員等の取り組みが紹介され、参加者からの質疑やコメントで会場は熱気に包まれた。また学生を主体的・能動的にするための情報や知見を交換し、創出し、共有するネットワーク (ALN) の開設も呼び掛けられた。問い合わせは aln@ml.kandai.jp まで。

(教育推進部 三浦真琴)



ポスターセッションの様子

当日のプログラム

- 13:00 開会挨拶 (教育推進部長・副学長・経済学部教授 林 宏昭)
- 13:10 基調講演 (教育開発支援センター副センター長・教育推進部教授 三浦真琴)
- 14:30 ポスターセッション
- 16:30 フィードバック

ワークショップ「思考し表現する学生を育てるV-レポート・ライティングに関する授業設計を考える」を開催しました

日時：12月14日(土) 13:30～17:30 場所：第2学舎2号館 C301教室

2013年12月14日(土)、関西大学・津田塾大学主催、関西地区FD連絡協議会共催のワークショップ「思考し表現する学生を育てるV-レポート・ライティングに関する授業設計を考える」を開催いたしました。本ワークショップの目的は、大学生のアカデミック・ライティングを支援するうえで各大学が抱える現状と課題を共有することはもとより、授業を中心に据えた場合、教員、職員、学生スタッフという立場から学生のライティング活動にどう関係することができるのか、という点を考えることにありました。「講演」と「ラウンドテーブル」の2部構成で行われた本ワークショップには、年末の多忙な時期にもかかわらず、全国の大学から51名がご参加いただきました。講演内容の詳細やラウンドテーブルの様子を限られた紙幅では伝えきれませんが、以下に要点をまとめます。

まず、青山学院大学の杉谷祐美子氏を講師としてお招きし、「レポート・ライティング授業デザインを考える」という題目で基調講演をしていただきました。教育社会学、高

等教育論をご専門とされる杉谷氏からは、ご自身が担当されている授業や大学生に対して行った調査データをもとに、学生のレポート・ライティングに関する現状と課題が報告されました。杉谷氏の授業は、学生が論証型レポートを段階的に書き進められるよう設計されている点に特徴があります。学生がレポート・ライティングのどの段階でどう躓く傾向にあるのか。それに対して何をどう支援していくのがより効果的なのか。そういう点について、ご自身の授業実践と学生の実態分析を通して、授業計画における力点が年々シフトしてきた例を示すとともに、レポート・ライティング授業をデザインする際に考慮すべき多くのポイントが指摘されました。

続いて、津田塾大学の大島美穂氏に「初年次教育の経験-読んだ、書いた、わかった?」と題し、ご自身の授業実践を通して見てきた初年次教育の楽しさ、難しさについての報告をしていただきました。大島氏は、授業で学生同士の刺激が起きやすい仕掛けを設けることの重要性を例示しつつ、そうした仕掛けから、ときに教員が期

待する以上に熱を帯びた議論が学生同士で展開される点に楽しさがあると述べられました。その一方、たとえば、入試の小論文を経て入学することで「自分は文章がそこそこ書ける」との自負を抱えている学生に対して、自主性や問題意識の構築など、大学での学習や研究に求められる文章スキルとの違いをいかに抵抗なく伝えるか、という点に難しさがあるとのことでした。

第2部のラウンドテーブルでは、「教員・職員・学生スタッフが連携した授業デザインを考える」と題し、私がファシリテータ役を務めさせていただきました。教員、職員、学生スタッフという異なる立場の参加者が入り混じったグループで、第1部の両氏の講演内容、各大学の事情・事例を踏まえながら、「レポート・ライティングの授業案を練る」という作業を目的としました。「講演を聴いて終わりではなく、自分のこととして考えることができ良かった」といった感想をいただくなど、企画者の想定以上に白熱した議論が各グループで展開されました。

(教育推進部 小林至道)

2013年度ランチョンセミナー 実施報告

CTLでは「アクティブラーニング入門一歩前」をタイトルに4回に亘るランチョンセミナーを開催しました。2012年の中教審答申以降、多くの大学がアクティブラーニングを展開するためにはどのようなチップスが必要なのか、そのノウハウを求めることに汲々としていますが、それはアクティブラーニングを極めて狭隘な視野から「手法」と限定して捉えているからです。本セミナーではそのような近視眼的・皮相的な視野から自由になり、アクティブラーニングを授業において実現するために何が必要なのかを授業実践者である教師の目の高さ、心の位置に敬意を払いながら、学生の成長を軸にして考えることを目指しました。

11月7日に開催した第一回目（通算14回目）のセミナーは「"How To"からの解放」をテーマに開催されました。アクティブラーニングが求められる背景、経緯には「TeachingからLearningへ」「Teacher-centeredからStudent-centeredへ」というパラダイムシフトがあります。まずはこのことを丁寧に読み解くために「How to」という発想から自由になり、「What (not) to」を改めて考える必要があるとの問いかけがなされました。

第二回目（11月21日）のテーマは「初年次におけるPBL～"学問モデル"のススメ～」でした。学問的な真理・真実に対して学生をアクティブな学習者に育てるためには教師が「問い」を与

えるのではなく、学生に「問い」を発見・発掘させることが肝要である、その体験が「問い」の構造を理解することにつながるという命題のもと、活発な意見交換がなされました。

「学生をアクティブにする試み～実践事例の紹介～」をテーマとした第三回目（12月5日）は、例えばグルーピングのような何の変哲もない作業にも学生をアクティブにするチャンスがあることを講師の実践事例をもとに参加者に体験してもらいました。

12月19日の最終回（通算17回）は「私たちもアクティブになりましょう～みなさまの実践事例～」というテーマのもと、自らの創意工夫や苦心談を参加者より話題として提供していただきました。そのどれもが示唆に富むものでした。

いずれの回も終始、和やかな雰囲気の中、講師と参加者の間で意見や情報の交換が活発になされ、相互に大いなる刺激を受けた模様です。印象的だったのは予定調和的な（事なかれ主義的な）授業ではなく、「空中分解」を怖れないチャレンジ、トライアルをしてみたいという声が多数あがったことでした。それはまさに教師がアクティブになるという宣言なのだと思います。次年度の開催を望む声もありました。そのリクエストには可能な限りお応えしたいと考えています。

(教育推進部 三浦真琴)

eラーニングの国際学会に参加しました!

昨年12月10-12日京都大学でeラーニングの国際学会がありました。その際ラーニングアシスタント8名（リーダー：池澤智也）が岩崎（CTL教員）、山本（CTL教員）、田上（CTL研究員）、奥貫（非常勤教員）と共に本学の三者協働型アクティブラーニングの活動実践について6本のポスター発表を行いました。学部生が国際学会に参加し、英語によるプレゼンと質疑応答をおこなうという貴重な体験をしました。

(教育推進部 山本敏幸、岩崎千晶)



ポスター発表の様子



発表したラーニングアシスタント学生と教員

Learning Assistant

LA活動報告



テーマと担当を次のリストに記します。



- 1 Global Internship Initiative: Opportunities to Envision the University Mission for Globalization (Kaho Suzuki, Shoko Matuda)
- 2 Students-Initiated Course: Curriculum Design involving all Stakeholders (Haruka Nakano, Tomoya Ikezawa)
- 3 Learning Assistant Initiatives to Promote Active Learning in Classrooms at Kansai University (Takahiro Jutori, Tomomi Otani, Ayaka Yamamoto)
- 4 Making the Hearing-impaired Student's Dream Come True (Keisuke Yokote)
- 5 ePortfolio Assessment Strategies (Tosh Yamamoto, Chiaki Iwasaki)
- 6 Course Design for the Advanced Communication to Build Trust (Masanori Tagami, Tosh Yamamoto)

教育開発支援センターからのお知らせ

2013年度授業評価アンケート実施結果紹介

2011年度春学期にアンケートをリニューアルし、3年が経過しました。2011年度以前は60%程度の実施率が、リニューアル後には実施率80%前後に向上されました。2013年度春学期は82.4%、秋学期は80.2%となり、高い実施率を示しています。

2013年度からは、授業進度の都合により、13回目の授業中にもアンケートを実施したいという要望に対応するため、早めに配布するようにしました。

2013年度の春学期、秋学期結果は、インフォメーションシステム内の授業評価アンケートシステムから閲覧することができます。また、授業改善に活用出来る詳細な分析結果が記載された

「フィードバックシート」は、科目毎に閲覧することができますので、是非ご活用ください。(CTL事務局)

【2013年度授業評価アンケート実施結果】

学期	内訳	実施対象科目	実施科目	実施率 ^{※1}	回答率 ^{※2}
春学期	学部生用	4,231	3,486	82.39%	63.93%
	教員用	4,231	3,188	75.35%	—
秋学期	学部生用	3,985	3,197	80.23%	58.60%
	教員用	3,976	2,974	74.80%	—

※1 実施科目÷実施対象科目 ※2 有効調査票枚数÷実施科目履修者数

教育開発支援センター

活用案内

CTL

教育開発支援センターでは、高等教育に関する様々な書籍をご用意しております。市販の図書に加え、各大学の紀要や報告書等も充実しております。閲覧・貸出は自由ですので、お気軽にお越しください。ご推薦頂ける書籍等も随時受け付けております。教育開発支援センター(千里山キャンパス第2学舎1号館1階)までお気軽にお問い合わせください。



書籍紹介 (いずれも貸出可能です)

『ワークショップデザイン論—創ることで学ぶ』

山内祐平(著)、森玲奈(著)、安斎勇樹(著)(慶應義塾大学出版会)

『大学生・社会人のための言語技術トレーニング』

三森ゆりか(著)(大修館書店)

『大学のIR Q&A』

中井俊樹(編)、鳥居朋子(編)、藤井都百(編)(玉川大学出版部)

『学生と楽しむ大学教育—大学の学びを本物にするFDを求めて』
清水亮(編)、橋本勝(編)(ナカニシヤ出版)

『ハーバード×慶應流 交渉学入門』

田村次朗(著)(中央公論新社)

『ルボ MOOC革命—無料オンライン授業の衝撃』

金成隆一(著)(岩波書店)

『世界で最もイノベティブな組織の作り方』

山口周(著)(光文社)

From CTL事務局

『〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング/キャリア

支援』を津田塾大学と連携し、大学間連携共同教育推進事業に申請し採択されたのが平成24年9月。それ以来、地道にライティング支援活動を行ってきました。

直近の例でいうと、1月末に、商学部からの依頼で、『入学前教育』のスクーリング内で、入学予定者を対象としたライティング指導を行いました。

『ライティング』の必要性・重要性の高まりを感じると同時に、ライティング支援関係者が行ってきた活動が浸透してきていることを感じて、つつい頬が緩んでしまいました。

今後も、『ライティング支援』に対するニーズがどんどん高まり、多くの学生がより良い文章を書けるようになればいいと思います。

ライティング支援が浸透していることを喜んでいる反面、一方で、「字を書く」と言う

事に対して、日本人が持っていた特有の意識が薄れてきているのではないかとことを常々感じています。

パソコンや携帯といったIT機器が普及し、それを利用するのが当たり前となった現在、文字を書く機会は激減しているはずですが、

それと同時に、個人差はあるものの、文字を書く時に、読み手の立場に立って、『丁寧さ・美しさ』を追求したり、字を書く時は心を落ち着かせるといった、“日本人特有の心”が、失われてきているのではないかと危惧しています。

IT機器の普及と日本の文化の継承をうまく両立することが今後の問題になってくるのではないのでしょうか。

2020年には東京でオリンピックが開催されます。

先のオリンピック招致委員会においても、日本で開催するメリットをアピールするために様々なプレゼンテーションがなされまし

た。日本人特有の精神・心が随所に盛り込まれていたと思います。

オリンピック期間には、世界中から多くの方が来日されるでしょう。ひょっとしたら、彼らは、我々以上に、『古き良き日本』を知っており、それを求めているかもしれません。

“日本固有の文化や精神(心)”で世界中の人々をもてなすことも、日本に課された使命なのではないでしょうか。

今後、ライティング支援活動において、テクニック面だけでなく、そういった“日本の文化”的なものをも踏まえて支援活動してもらえたら、なお嬉しいと思っている小姓です。

最後になりましたが、この1年、本当に様々な方にお世話になりました。ありがとうございました。この場をお借りして御礼申し上げます。

次年度以降も、微力ながらCTLの活動に尽力していきたいと思っております。

(大)



関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching and Learning

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-1513 FAX: 06-6368-1514

http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html

発行日/2014年3月20日 編集・発行/関西大学教育開発支援センター